

がん化学療法レジメン管理マニュアル 第3版

濱敏弘 監修/

青山剛, 東加奈子, 池末裕明, 内田まやこ, 佐藤淳也, 高田慎也 編

＜書評者＞ 勝俣 範之 (日医大武蔵小杉病院教授・腫瘍内科)

がん薬物療法剤は、化学療法剤、ホルモン療法剤、分子標的薬と合わせて、現在では150種類を超える数となった。さらに、これらの薬剤は単剤で投与されるのではなく、複数の薬剤を組み合わせ、「レジメン」として投与される。

がん薬物療法専門医が不足している日本では、まだまだ、がん薬物療法の標準治療がきちんと行われているとは言い難い状況にある。「エビデンスに基づく標準治療の実践」は日本における長年の課題である。がん薬物療法のレジメンとその対応マニュアルは、病院ごとに作成・管理されるものであり、各病院のノウハウが詰まったものである。優れたレジメンマニュアルは、専門医の多い病院では、作成するのはたやすいことであつたと思われるが、専門医がいない、少ない病院では、きちんとしたレジメンマニュアルを作るのは困難であつた。

この『がん化学療法レジメン管理マニュアル』は、日本でも有数のがん専門病院の薬剤師が中心となつて、これまであまり公開されることがなかった各病院のノウハ

ウが詰まったレジメンマニュアルをコンパクトに、標準化、公開してくださつた。このような本は、一般病院にとっては、喉から手が出るほど欲しかつたのではないか。

このマニュアルの優れているところは、各薬剤について、溶解液、投与時間まで丁寧に書かれているところである。また、投与前基準、減量・中止基準、治療再開基準、副作用対策まで書かれているため、このマニュアルをそのまま、院内のレジメン審査委員会に提出しても、問題なく承認されるであろう。また、肝機能障害時、腎機能障害時での投与量減量基準にも詳細に記載されているため、薬剤師だけでなく、専門医にとっても役立つ情報が載せられている。抗がん剤を溶解液に調製してしまったが、すぐに使う必要がなくなつた際に、どれくらいまで薬剤がもつかどうか、希釈後の安定性についても書かれていて、おまけに、経口摂取できなくなつた患者さんが、胃チューブから投与しなければならなくなつた際に、経口抗がん剤の懸濁可能性についてまでも書かれている。まさに、かゆいところに

手が届くマニュアルとなっている。

このマニュアルのウィークポイントをして挙げると、現行の標準治療のレジメンを全て網羅しているわけではないということである。全ての標準レジメンを記載するとなると、もはやこのサイズと分量の本にはできなくなつてしまう。多くのレジメンは薬剤が重複していたり、類似した薬剤が使われていたりするので、そのあたりは各自応用していただければよいと思う。

この『がん化学療法レジメン管理マニュアル』は、かゆいところに手が届く、がん薬物療法を行う病院には、必携のマニュアルであると言つてよい。このマニュアルを皆に手に取つていただいて、がん薬物療法が安全かつ正しく行われ、全てのがん患者さんの治療が適切に遂行できるようになることを願う。

● B6変型 頁638 2019年8月
定価: 本体4,000円+税
[ISBN978-4-260-03837-9]
医学書院刊